

# 社会運動の変容と分極化

——一九二〇年代、赤松克磨に焦点をあてて——

成 哲 沢 松

一、はじめに

二、一九二〇年代初期日本左翼の認識枠組

三、関東大震災の衝撃——変容の開始

四、「科学的日本主義」の提起から論争へ

五、革命主義と改良主義——二極分解

六、反日帝運動に対する対応の諸相

七、おわりに

降、二〇年代半ばの「現実主義」に至るその変容ぶりを検討することを通じ、そういういた二〇年代という時代の構造の一断面を浮彫りにしてみたい。<sup>(1)</sup> そのさい、ちょうどその半ばにたたかわされた志賀義雄との論争にも照明をあて、双方に厳存した問題点を確認しておこうと思う。

双方における問題点とは、基本的に言つて、「実情」指摘と「原則」高唱とに論が明確に二極分解したことを指している。そこで、福本イズムと社会ファシズム論が大きく作用したことは、あらためて指摘するまでもない。総同盟が分裂し別組織がそれぞれ樹立されたことは、そうした議論あるいは理論上の分岐の結果であるとともに、反面においてそうした分岐をもたらした原因でもあった。

日本の社会運動の一九二〇年代は、おもにロシア革命、関東大震災、中国「国民革命」などに相次いで衝撃を受け、その度毎に大きな変容を遂げ、ついに分極化と相互対立という結果に到達した時期である。本稿では、当時の運動指導者を代表するひとりとして赤松克磨を取り上げ、関東大震災に強いショックを受けて以

本社会運動は三つないし五つの系統に分化し、たがいに鋭く対立し合った。理論・思想つまりイデオロギーの面では、レーニン・スターリン主義的教条主義と、修正主義ないし反共社会民主主義とに分極化した。

そのようななかで、赤松克麿の場合、早くもその「現実主義」のなかに、ナショナリズムへの傾斜を内包していたのであった。その初発のきっかけを成したのは、またまたかの関東大震災であつて、そのとき彼は日本人の民族排外主義の甚だしさを心に強く刻みこんだのであった。そして、その想いをいつそ強固にしたのが、アメリカ合州国の排日問題との出会い、中国革命高揚のインパクトなど对外関係の変化—緊迫化であった。こうして赤松は、一九二五～六年頃には、国家＝生活共同体論と統治階級の「超然」性規定とに立って、他地域（具体的には中国のことであるが）のナショナリズムに対抗する日本ナショナリズム論を強固に持するまでになつたのである。

赤松の、こうした対抗ナショナリズムの議論は、それ自体においてはそれほど珍しいものでもなかつたが、時宜に適していたこと、社会運動の真っ只中から提出されたものであつたことにおいて、特徴的であった。その頃中国においては、第一次国共合作以降「国民革命」が怒濤のような進展を見せ、二六年夏頃からその東北地方への波及が見られた。その結果、日本においては「満蒙問題」という形で、同地における植民地権益の確保要求<sup>ハイカクガフ</sup>が起つたのであった。

高畠素之（派）や大川周明（派）、そして石原莞爾・一夕会や桜

会は、そのような日本帝国主義の危機を「日本ファシズム革命」によって乗り切るべく、かねてから理論をあたため人脈をつなぎ資金工作をおこなつていた。赤松克麿が日本左翼を芯部から腐らせ運動をその内部から潰して、こうした「右翼革命運動」の潮流の一端に連なつたとき、「満州事變」（九・一八事變）という日本ファシズムの実際化の第一歩が印されたのであった。それは、やがて（ダラダラと引き延ばされはしたもの）「日本ファシズム革命」の口火となるに至つた。まず血盟団事件が、つづいて五一事件が起こされ、日本の国際連盟脱退、といふうに局面展開がなされていったからである。

おおよそ以上のようないきさつを生むに至る前提条件の解明に努めたい。具体的にはナショナリズム論の頃、だいたい二五～六年の時期までに絞る。それ以降三十年代初頭における、赤松的社會民主主義の國家社會主義への、そして日本主義への、（急激な）転化と思想的下落などについては、別稿を期したい。本稿とは異なつた方法——より政治史的・運動史的なアプローチが、適切だと考えるからに他ならない。

## 二、一九二〇年代初期日本左翼の認識枠組

いわゆる「前期学生運動」<sup>(2)</sup>の旗手のひとり赤松克麿は、少くとも一九二一年一月から一四年一〇月まで、「無政府共産ヲ主張スル」「急進派」「過激派」という意味での（つまりアナキズムとコミニズムの区別がされていない）「共産主義抱持者」として、

「特別要視察人（甲）」に認定され官憲の日常的監視下に置かれていた。<sup>(3)</sup> 内務省—警察の資料にごく普通の時間的、れなどを考慮に入れれば、狭くとっても一九二〇年八月から一三年一〇月頃までの間、彼は新人会や総同盟本部など運動中枢部におり、当代の日本左翼の重要な一員であった、とすることができる。

ここでの問題は、まず第一に、そういう赤松が、「資本主義的社會制度の改造と万民和樂の新社會建設」という終局目標達成のために、どういった現状認識をし、どのような手段方法を構想していたか、その考え方の基本枠を確認することにある。その間の多数にのぼる著作を要約すれば、その大筋は次のようにまとめられるであろう。<sup>(5)</sup>

(1)イ 日本は、經濟的實質において不平等である。つまり資本主義社会であって、資本家階級が労働者階級を「支配し征服して居る」。「法律上、政治上、社會上」も、そうである。そういふた階級制度の根元には、私有財産制と種族間の征服という事実がある。国粹会・大和民労会・赤化防止団・愛國団といった「封建的臭味」（俠氣、親分肌、伝統的趣味などを特徴とするそれ）を持つ「反動團体」はしそん「保守的國民運動」にすぎないが、「資本家若くは官憲の一別動隊」あるいは「御先き棒」として、「労働運動乃至社會運動を抑圧」するのに使われることがある。だが、現下の思想情勢からすれば、彼らのような「狂熱的愛國主義」の伸びる余地は、ひじょうに少ない。

①ロ 日本をふくむ「過去の民族国家は凡て、支配階級と被支

配階級とから成立した階級国家である」。ただし、「國家社会」とか「眞の愛國」といった言葉使いもあって、赤松の國家規定はいま一つ明確さを欠いている。この段階では、國家がまやかしにもせよ国民全体のものとされていること（國家の幻想共同態規定のことだが、行政管理的側面をも含めて）や、その国家内の、とくに支配権力内のさまざまなグループの間の調整や統合機能の側面など、当然あるべき指摘が欠落している。

①ハ 「我国の支配階級は既に三大戦争を敢行し」東アジアに「特權的地位」を樹立、もって帝国主義的「強国」となったので、朝鮮などから「反逆」される事態に今や立ち至っている。そのように帝国主義とは、「領土と利権と威名とを盲目的に追求することを第一義的國家生活とするもの」で、「植民地民族の搾取」にもつとも多く依拠している。すなわち、植民地を「財政的支柱」とすることによって国内労働者を高く買収し、ひいてその奴隸化をもたらしている。また、植民地人民を軍隊に組織することによって、自らの手を汚すことなく対外侵略戦争を行し、かつ国内対立激化にさいしては鎮圧のために植民地軍を使っている。こうしたすべての根源には、「奪掠を事とする社會階級」に他ならない資本家階級、という存在がある。

②イ したがって、奪掠の社會階級たる資本家階級の「絶滅」ひいては「階級撤廃」を目指す「階級闘争」こそが、資本主義・帝国主義打倒のために必要とされる。その基軸となるのは、「最も明確な戰闘意識を有する」「都市及び鉱山の労働者」の組合運動である。都市のそれには、しばしば官営ないし公営の

鉄鋼業や交通業、そして民間の出版・印刷業の各労働組合運動が、含まれていた。だがそれと同時に、「農民其他の分子を包括した全労働階級の大衆運動」が展開されなければならない、と主張された。

②ロ 中心となる労働組合運動こそが「城壘」なのであって、そこ「足元」を「組織」的に、「秩序をもって」「堅実に一步一步固めて行」かなければならぬ。「無謀、無組織、無秩序、無見当の」「焼き打ちや暗殺も実行運動には相違ないが、それが労働運動の本職ではない」。ただひたすら「事実上組織の威力を鍛え上げるがよい」。そのために、「無産階級が鮮明な階級意識の上に立ち、階級的正義の要求として、政府及び資本家に向って、有利なる社会政策を強要することは……肝要である」。すなわち、言論・集会・結社の自由や失業防止に関する社会政策的施設（二三年三月に、軍縮剩余金譲渡、失業中の生活保証、八時間労働制即時実施及び残業の撤廃、最低賃金制度の導入、対露通商即時開始、労働組合による職業紹介管理の六項目要求がなされている）といった、「重要な現実政策を飛び越えて」はならない。「現実に立脚する実際運動」を進めなければならない。

②ハ 民族独立運動や人種解放闘争は、一九世紀の問題の繰り越しであり、民族主義の限界を越えない限り「大帝国主義に対する小帝国主義の反抗」「反逆」に止まらざるを得ない。だが、その「方向を転換して、帝国主義そのものの批判及び否定」に及んだとき、初めてそれは「階級闘争の前衛戦」となることができる。

②ニ 結論的に言えば、「所謂朝鮮独立運動は時代遅れである。極東民族の自決問題も極東無産階級の解放問題も、その一切の解決の鍵が日本の帝国主義的没落に於いて見出されるものとすれば、朝鮮無産階級の諸君は「日本の」労働組合若くは政党に加盟せられるが得策だと信ずる」。なお、この時期、おおむね議会主義は否定されている。ちなみに、「婦人問題」——現代風に言えば女性解放であるが、これも労働運動の勝利にもとづく資本主義的経済組織の改造に依る、とされていた。

以上のような、この時期における赤松克麿の議論は、ほぼレーニン・スターリン主義的コミニンチルン・テーゼという公式の枠内に納まるものであった。それに、総同盟内共産党フラクションメンバーとしての個別経験がそれなりに生かされ、いくぶんの創意が付加されていた、とすることができる。

### 三、関東大震災の衝撃——変容の開始

さきに註で示した有馬論文も指摘しているように、関東大震災が日本の社会運動（家）に与えた影響は、きわめて大きいものがであった。それを一言で特徴づけるとすれば、圧倒的な数の大衆が持つ巨大な力——たといそれが負の方向にあつたとしても——を人々が痛切に認識させられた、ということである。したがつて、震災後、支配権力側も被支配側も、これにどのように取組むかを切実な課題としたのであった。支配の側は、震災復興景気、商業

ジャーナリズム振興（文壇・論壇などの「大衆化」、日本ブーム、商業新聞の発刊、ラジオ放送の開始などを含む）、高等教育機関の増大拡張、そして普通選挙と治安維持法ならびに同改悪（死刑導入、規定の曖昧さによる罪の「無限」拡大を特徴とする）などを提示した。

これに対し被支配の側においても、運動の大衆化のためのさまざまの方途が提案され、議論され、採択ないし拒否されたのであつた。そういうなかで、否応なくひとつずつ渦心を形づくったのが、無産階級すべてに選挙権を与えるという普通選挙（普選）に対するしどういう態度をとり、どういふうに対処するか、であったことはほぼ異論のないところであろう。

赤松克麿において大震災のインパクトはことに痛烈であり、ある意味で直接的であった。ほかに日本人による調査がほとんど無かつた震災直後の時期に、吉野作造の依頼に応じるという形ではあるものの、「罹災者」たる朝鮮人や労働運動家・社会主義者などの聞き取りを行つたりしていたからである。彼はまた、「罹災者救援思想団」の世話をにもなつて活動した。<sup>(6)</sup> したがつて、日本人大衆ならびに警察・軍などの、拷問と虐殺に向う排外主義のすさまじさ、あまりにも露骨な暴力の行使に圧倒されたであろう。そこで赤松は、自身かねてより主張していた運動の大衆化の必要性を、誰にもまして痛切に、あらためて思い知つたに違いない。こうして、震災後における彼の論議の基調は、何をおいてもまず運動の大衆化を、となつたのである。<sup>(7)</sup>

しかしながら、一口に大衆運動といつても、その内実はじつに

さまである。二三年一〇月から翌年一月ごろの時期の赤松は、いわば過渡期にあつたと言えよう。その間の著作は数も少なくて短かいものが多いのだが、その当時の彼の運動のイメージをまとめれば、次のようになる。<sup>(8)</sup>

〔二〕① 資本が集中し、大資本・金融資本・大会社がいっそう発達する。逆に、小会社・個人商店などはつぶれ、「中産階級下層分子」や無産階級の仲間が増加する。したがつて、階級対立は激化する。

② 普選が実施されれば、（無産階級の数は圧倒的に多いのだからこれを支持する）「急進デモクラット」が多数選出されるであろう。その一部には、明確に「無産階級の立場に味方し：これを支持する中産階級進歩分子」もかならず存在する。これら急進デモクラットまたは中産階級進歩分子は、一般無産階級を軸とし、他に農民層をも加えて、ひとつの「政党」を創る必要がある。この政党の指導のもとに、急進デモクラットは、議会の内外において「軍閥、大ブルデヨア」を攻撃し、「デモクラシーを基調とする民衆的政治運動」を進展させ、政界に「大きな渦巻を起す」。これは、全無産階級解放のための「解放戦の第一歩」としての「政治行動」「政治闘争」である。

③ 右の②のような闘いは、①のような事情を背景に、生産現場におけるゼネラル・ストライキに引きつがれなければならぬ。それは、「公然たる決戦の序幕（トロツキイ）」となる。だが、「最も重要な最も決定的な闘争舞台は街上である」。この

ようにして「無産階級解放の行程」は進み、「社会革命」がついに実現されるのである。

種々曖昧な所も少なくない主張であるが、普通選挙に対しても、無産大衆を軸とし急進デモクラットをも包含する政党を創つてこれに打って出、議会においては民主的・進歩的な法令などを獲得すべきだとしていた、と見てよいだろう。ただし、議会の内のそういういた鬭いと議会外での鬭争、とくに生産現場でのゼネストとの関係、「決戦の序幕」とされた街上鬭争とは何か……疑問は多い。この段階において社会改革の仕方についての赤松のイメージが、固まつていなかつたためと思われる。

そのような一種模糊とした過渡期にあって、まだ躊躇やためらいのあつた赤松克磨であったが、このあと一九二四年二月以降になると、いつそう明白に、現実主義的諸政策を是とする地平へ総同盟とともに踏み入つた。すなわち、総同盟のいわゆる方向転換宣言（赤松の起草による）にいわく、「今や吾等は過去におけるよりも、其政策をより現実化し、積極化させねばならぬ……。少數者の運動から転じて大衆的運動に向ふべき一段階に到達した。……改良政策は……積極的に之を利用する。……例えばブルジョア議会によって労働階級の根本的解放を期待する処毫もなきは勿論なれども、普選実施後に於ては選挙権を有効に行使することによりて政治上の部分的利益を獲得すると共に、無産階級の政治的覺醒を促し、又国際労働會議に就いても之が対策を慎重に考慮する、と。<sup>(9)</sup>具体的に言えば、投票に参加し、ブルジョア議会の役

割を一定認める（無産政党の結成も）、ILOに代表を派遣する、労働組合を公認しつつ規制する労働組合法といったものに賛成する、治安警察法・警察犯処罰令・行政執行法・違警罪即決令の撤廃と騒擾罪の乱適用廃止を要求する、などの新しい政策方針が赤松らによつて提起され、総同盟に採択されたのであった。<sup>(10)</sup>

言われているように、これは「方向転換」には違いない。だがそれを主導した主要人物のひとり、赤松においてその思想的軌跡を多少とも詳しく辿れば直ちに明らかなように、「方向転換」はじつは、それまでの変化の積み重ねの上に、その延長線上に位置していたにすぎなかつたのである。たとえば、さきの(一)口には、有利な社会政策をもぎとる、言論集会結社の自由を要求する、とあつた。政党結成も、すでに(二)で主張されている。また、大衆的デモクラシー運動の展開というイメージと議論は、社会革命の序幕とか第一歩という文脈と連関さえ切り離すならば、さきの(二)において提出済であつたとも言えるのである。総同盟と赤松克磨における「方向転換」とは、じつは「転換」それ自体が問題なのではなくて、言うならば何かを切り捨てたことが真に意味とされるべき重要事であつたと言わなくてはならない。その意味では逆にまた、ここに一線は踏みこえられた、と断言することもできるのである。

#### 四、「科学的日本主義」の提起から論争へ

「方向転換」によつて明確に踏み越えられた一線の内実は、同

年一一月相次いで発表された二つの論文「わが国資本主義の特殊性と無産階級政党」「科学的日本主義へ」において、やや系統的に、具体的に明かにされた。<sup>(11)</sup>

(三)① 「明治維新は純然たるブルジョア革命ではない」。商業階級と町人階級の発達が不充分であったところに「諸外国の圧力による民族的自覺に乗じて」下級武士たる諸藩の志士が、衰運の封建制度に最後の一撃を加えたにすぎない。

② その後も歐米帝国主義圧迫の環境下にあつたので、資本主義は自生的発達を見ることなく、安易に「反動主義的」「封建的勢力」と妥協癒着して「政商」などの形をとり進展していく。つまり、「国家的官僚的資本主義」を創設した。他方、反動・封建勢力を代表するものは、元老・内大臣など天皇側近勢力、華族、藩閥、官僚、軍閥で、宮中、枢密院、貴族院、各省庁、参謀本部といった所に居る。彼らは、「もっぱら専制主義」をもつて旨としている。

③ かつて自由民権運動は「自由主義に拠つて藩閥政府と戦つた」が、「彼等はむしろ藩閥に対する封建的不平分子であつて、戦闘的ブルジョア階級の代表者ではない」。

その末裔たる今日の既成政党は、立憲政治の粹であるはずなのだが、我が國の場合実際には「伝統と因縁と情実との相異によって派生し割拠した政権争奪群」にすぎない。彼らは、「人心收攬のため一面に於て自由主義傾向を誇示しながら、他面に於て反動主義傾向を次第に帯びつつある」。

④ したがつて、創られるべき無産政党は、その内に「かなり自由主義の要素を含」んだ「社会主義政党」でなければならぬ。それは、「一方に官僚軍閥政商反動的政党と戦ひ、他方に軍国主義に育まれた無産大衆を啓蒙して行く」任務を負つている。また、「一般国民思想の中にも反動主義が根強く植えつけられて居る」ので、その除去も任務となる。

⑤ 要するに、「資本主義より社会主義への進化的過程の基調」は「普遍的」で、「各国の資本主義崩壊に適用せられる」。だが、「その基調に立脚して進行する現実的過程は、各国の資本主義発達の相異に従つてそれぞれ経緯を異にする」。だから、我々は、普遍的原則が「日本という資本主義国家」の上に「いかにして」どのように適用されるかを、したがつて「日本国家」そのものを知らなければならない。ロシア革命や英國労働運動は、そのまますぐに日本の社会運動の指導方針作成に役立つものではない。あくまでも副次的参考にすぎない。杜撰な類推や独断は「科学的精神」の敵である。かつて「迷信的日本主義」を排して「類推的インタナシヨナリズム」に移つたが、今や「さらに科学的日本主義へ転ずる時」である。それは「科学的インタナシヨナリズムに諧調する」。

このように、もつとも劇的に「転換」したのは、じつは無産大衆像と日本の現状認識であったのである。

それ以前の時期、つまり新人会を拠り所に総同盟の助つ人的活動をしていた一九一〇年代末から一二三年末と一四年初め頃の時期

において、労働者階級はすべての価値の源泉であり、いわば「普遍化された理念」の体現者であると想定されていた。また、当時の日本の現状も、デモクラシーに向う「世界の大勢」に裏打ちされて、そういったあり得べき労働者像を現実のものとし、それを梃子として日本を、ひいては世界全体を「万民和楽の新社会」と「改造」することのできる条件を備えている、と素朴に前提きれていった。<sup>(12)</sup>

しかしながら、さきにも見たように、関東大震災時の拷問と虐殺に向う無産大衆の排外主義のすさまじさ、軍・警のあまりにも露骨な暴力行使に痛烈に打たれた赤松は、しばし言葉を失つていたのであつた。さきの〔〕に要約した当時の彼の考えが過渡期にあると述べたのは、そこにおける基調がいまだ樂觀主義的な大衆像・現状認識に傾いたまま、他方で圧倒的多数を動員することによつて、いわば個々の主体性を欠いた巨大な集団として大衆の力を發揮せよ、と説いていたからに他ならない。だが、二四年二月の総同盟宣言においてもなお、「転換」はまだ半分程しかなされなかつた。改良政策の要求ならびに自由主義との提携を骨子とする新方針は、さきにも一言したように、日共の主要メンバーのひとりとしてぱりぱり活躍していた時期の認識をひきずり、いわばそのストレートな延長線上にあつたのである。

このときの赤松の議論は、「無産階級精神」の未浸透、あるいは「プロレタリア化」の不徹底という捉え方を基礎として組み立てられていた。未浸透であり不徹底なのだから、農民は安易に「政治」に乗り出すべきではなく、学生は学内・教育問題にのみ止まるのが良く、鉱夫はとにかく組織に入加入しなくては始まらない……要するに、各階層・階級はおのれの区分と枠をきっちりと確定し、それぞの範囲と分限の内にあくまでも止まらなくてはならない、というのである。こうした上で総同盟本部が、中央の、いわば高所から、それらの間を調整し、統制・管理する。したがつて、総同盟は中央集権制の集中的な組織でなければならぬし、現にそくなつていて、<sup>(13)</sup> といふ。そうであればこそ、この厳しい現状のなかで、労働者などの団結権の獲得、すなわち政府官僚ならびに議会の承認という最小限要求をも威力をもって実現することができるのだ、とされた。

だが一方で赤松には、「労働組合は無産階級を全部的に包括する戦闘団体」ではない（他にも戦闘的な無産団体がある）という震災時に思い知った考え方があり、それは「主義者は殺される、存在が許されない」という同時期のもうひとつ認識<sup>(14)</sup>と連なつて、彼を新しい無産政党の結成へと向わせた。その新党は、あくまでも一般無産階級が中心であるが、それに農民や「中産階級進歩分子」（俸給生活者の下層を含む）などを包みこんで幅広い結集体とすること、また「如何なる方法で資本主義を変革するかといふやうな」遠い「何年か先き」のことに「氣を揉むよりも、忠実に労働者団結権確立のために戦ふもの」であること、の二点に分析として表現上の結実を見たのであった。

中心が置かれていた。<sup>(15)</sup>

こうして見ると、赤松は現実總体に対し、ことに一般大衆の「無自覺」に対し、芯から悲觀していたため、①いだずらに革命論を生一本・ストレートに高唱すべきではない。②要求はごく低いものから順次に獲得し、確実に保つていかなければならない、というやり方に転じたのであった。そこにおいてもまた、その反面、本部すなわち中央の位置と価値が逆にせり上り、集権主義的傾向がより顯著になっていたことに注意を喚起しておきたい。

こうして、ニヒリスティックに巨大組織を操作するテクノクラット（官僚）たる赤松克麿、というイメージが誕生したのである。かつてアナキストが彼を「労働官僚」<sup>(16)</sup>と呼んだことがあつたが、今となればそれはぴつたりであった。だが、それに「反動的」という形容詞を冠したのは、必ずしも当つていなかつたであろう。赤松はこのときまだ、最終目標としての『革命』という看板も、そこに至るための現状認識（-）を参照）も、また（）のような運動論も、表面上放棄していなかつたからである。ただ、運動の取組み・方法を変えるべきだと、とりあえず主張していただけなのである。このとき赤松克麿は、まだ、実際（組織官僚）と志向（革命論）との間で引き裂かれていた、と見るべきであろう。

だが、コミュニスト・ビューローから日共再建へという時期の、志賀義雄や水野成夫などからすれば、看板を下ろしていなければ、「軟弱」で「調子の低い」運動論などをぶちまくる、そういった赤松がことに腹立たしく、『犯罪的』にさえ映つたに相違ない。この頃すでに志賀も水野も、福本イズムでしつかりと「理論

武装』していたから、よけいそうであった。レーニンやスターリンなどの翻訳が、初めて次々に公にされていた時代という背景もあつた（たとえば、レーニン『帝国主義論』の青野季吉訳は、一九二五年に刊行された）。

一九二五年六月、まず志賀義雄が批判の口火を切った（『科学的日本主義』の理論）『マルクス主義』六月号所収。七月の赤松の反論に対し「再び科学的日本主義に就いて」（同前誌九月号）。一月には、水野成夫が福本イズムで追い打ちをかけた（『経験的現実主義のファシズムへの転向』同誌二六年一月号）、「社会民衆党排撃の根拠」（同一二月号）。ふつう前者をもつて「科学的日本主義論争」と呼ぶが、論旨が類似しているので、ここでは水野による一年後の批判をも合わせて考慮に入れることとする。

志賀の論点は、①帝国主義は世界經濟、ひいては世界的体系をなしているから、これに対抗するには国際的に連関した運動が必要である。にもかかわらず赤松は、「一国独立のしかも特殊単位としての日本」を指定して「天然の資源が乏しいから行詰る」という誤った一国主義的議論しか、していない。②日本の支配階級は「一個の全体に融合され」ており、すでに「金融王、官僚、軍閥の三位一体」が出来上っている。諸政党はその利益を代表している。赤松の「寄合世帯」論と日本資本主義発達の現状論は過少評価であり、認識が古い。③赤松はしきりに自由主義の「効用」を説くが、帝国主義日本の現在においてそれは「一のお伽噺」でしかない。「封建的軍國主義的要素と資本家階級との不可分なる統一体」は、相乗効果をもつて無産階級に圧力を加えているのが現

実であるから、自由主義的（政策）ではなくて、無産階級による革命が必要なのである。（四）赤松は、経済的と政治的の各部分要求、労働組合の量的拡大、労働者などの団結権の確立つまり公認化、にあまりに重きを置きすぎる。つねに「革命的戦闘精神」と、鮮明に全体を見通すことができる。「階級意識」とをもって、そういう目的達成のための闘争を開すべきである。同時に、そこにおける「戦闘的前衛分子」の推進力・牽引車としての役割をいつそう高く評価しなければならない。これまでの労働運動の歴史についても、誤謬に充ちていたと決め付けるなど、あまりにも悲観的に評価しすぎた。これまでの労働運動の歴史にほかならない、というものであった。

## 五、革命主義と改良主義——二極分解

このとき志賀義雄対赤松克麿の議論は完全にすれ違いであって、その意味では論争はまったく不毛であった、としか言いようがない。すなわち、前者が一般と全体を強調するのに對し、後者が特殊と部分を重視する。さきには、支配対被支配の絶対的、基本的な対立が強調され、あとには支配側の内における相対的、副次的な対立をもつと評価するべき、とされる。前者が、究極的には、と言うところで、後者は当面の急務は、とする。あちらが誰々は結局（大）ブルジョアにすぎない、と言えば、こちらはその

者が自由主義をとる限り暫時提携し得る、とする。そもそも「革命主義」者の志賀は運動と大衆の両イメージ面で樂天的、積極的であるが、「改良主義」者とされた赤松はその両面において著しく悲観的、消極的であつた。相違といつても、これほどの違いはそう滅多に無いであろう。物事の捉え方が、ほとんど対蹠的であつた。

徹底的に「実情」を説く赤松克麿に対し、革命の「當為」を論じる志賀義雄は、その本質的正しさにもかかわらず、まったく分が悪い。赤松は當時最大の労働組合連合体の中核におり、かつほんの二、三年前には共産党フランクの重要メンバーであつたから、「志賀君は日本の現実、とくに労働運動の実情にひどく不案内のようにだね」と嘲笑<sup>せせ</sup>うと、ひどく真実味を帯び説得力を持つてしまふのである。それは、いかんともしがたかった。現在の我々の立場からすれば、もちろん、兩者を合した所にこそ正しさがあつた、とまずは言わなくてはならない。「特殊」と「部分」を踏まえ、それらを積み重ねた「一般」と「全体」が必要であつたのだし、「絶対的」「基本的」対立と「相対的」「副次的」対立はともに視野に入れられ各々がそれなりに位置づけられなければならず、「当面」と「暫時」から「究極」と「結局」に至る全運動過程が具体的に明らかにされるべきであったのである。状況認識と大衆像は「悲観的」「消極的」にすぎてはならないが、極楽トンボで考え無しの「樂觀的」「積極的」であつてはいけない。運動を進めていくに当たっては、個別・具体的に検討・総括を行ないつつ、總じてニユートラルでザッハリッヒな見地をしつかりと保持することが必要とされるであろう。

一言でいえば、一九二一～二三年の「共産主義抱持者」も、二五年後半の「マルクス主義者」（レーニン主義者ないしスターリン主義者でもあった）も、つまり、赤松も志賀も、真理の半片しか握っていなかつたのである。したがつて、我々としては、後者の本質的正しさの上に立ちつつも、なぜ前者を枠内に取りこむことによつて自己の内実を豊かにすることができるなかつたのか、その理由をいつそ詳しく述べることが必要とされるであろう。

背景には、実際運動の局面において周知の総同盟第一次分裂があり、理論面では猖獗しょうけつをきわめた福本イズムと社会ファシズム論があつた。

総同盟における左・右両派の対立は、さきの「方向転換」宣言採択（二四年二月<sup>(17)</sup>）にさいし発生した意見の相違にもとづく、といわれている。だが、対立を激化するきっかけとなつたのは、同一年四月下旬、関東鉄工組合大会における両派の主事争奪戦であつた。以来、左派は、関東労働同盟会長の田口亀造のもとに、また産業労働調査所の創設後にはその内幸町事務所を拠点として、結集した。それに対し右派は、松岡駒吉の家のあつた大崎戸越から品川、大森、蒲田など工業地帯において労働組合を順次組織し、勢力を張つた。こうして、対峙はいつそ組織的なものとなり、激化していった。

一〇月五日、総同盟関東労働同盟会の定期大会が開かれたが、両派は衝突、左派四組合の代議員が退場し右派がいちおうの勝利を収めた。一日、左派は多数の組合員を動員して、右派幹部二名に暴力を振るつた。六日、関東労働同盟会理事会は、左派の渡

辺政之輔、相馬一郎、春日庄次郎、河田賢治、立松市太郎、杉浦啓一の計六名の除名を決定した。このあと、同理事会の除名決議の取り扱いをめぐり、各級機関で紛議となつていつたが、ついに一二月七日右派が東京鉄工組合を結成したので関東鉄工組合は組織分裂し、ひきつづき右派優位のもと関東労働同盟会の事実上の分裂がもたらされた。だが、同一八日、総同盟中央委員会において表面上の妥協が成立、六名は自分たちの方から退く、除名五組合（後述）は関東同盟会から除名とし本部直属として組織結成を認める、などが決まつた。二〇日、その取り決めにもとづき関東地方評議会が結成され、翌二五年一月一七日から『労働新聞』（半月刊）の発行も始まつた。だがそれは、予想された通り左派の一大牙城となつていき、「本部とも対抗」する勢いさえ示すに至つたのである。

こうして、二五年三月一五～一七日の総同盟大会は大荒れとなつた。以来、左派は、関東労働同盟会長の田口亀造のもとに、また産業労働調査所の創設後にはその内幸町事務所を拠点として、結集した。それに対し右派は、松岡駒吉の家のあつた大崎戸越から品川、大森、蒲田など工業地帯において労働組合を順次組織し、新派二五組合・七五〇〇名（総同盟全体の四分の一に当る）はこれに反対の動きに出、東京では関東地方評議会参加の七組合の合同大会を開いて「総同盟内部革新」の狼煙を公然とあげた。ついで四月九日には二五組合連署の檄文を配布し、反幹部の火勢を煽つたが、他方総同盟中央の右派も強硬な態度をとりつけた。そこで左派は、一二日に日本労働総同盟革新同盟を結成する

に至つた。

一六日、関東地方評議会と傘下の六組合（関東鉄工、東京東部合同、同北部合同、時計工、関東印刷工、横浜合同）の除名が決まった。これ以後、たがいに組合員獲得合戦に入り、泥沼の様相を呈していった。五月七、八日、左派は革新同盟第二回全国代表者会議を大阪で開き、労働運動の一般方針をたて「単独にて実行していくこと」を決定、総同盟の枠外へ一步踏み出し始めた。一〇日、総同盟大阪連合会が分裂。一六日中央委は、さきに除名通告済みの六組合に加え革新同盟参加の全二三組合の除名を可決した。他方二四日、革新同盟全国大会が神戸にて開かれ、二五日別組織として新しく日本労働組合評議会が樹立されたのである。

以上概観したような両派の運動・組織両面における抜き差しならぬ対立と、さきの志賀・赤松による「科学的日本主義」論争における全くのすれ違いで正反対ともいえる認識・見解とは、裏と表から符節を合するものであり、一方が他方の、他方が一方のそれぞれ反発を促進し助長するという関係にあつた。

しかも、そういった相互反発を惹き起こす「理論的基礎」もまた、当時ほかに存在していたのである。そのひとつは、かの「有名」な「分離・結合」の運動・組織論を軸とする福本イズムであった。その頃志賀は、「日本の労働運動は綜合過程そのものの内部に於て、同時に分化過程を経験しなければならぬ状態の下に置かれて居る」として、赤松ら「改良主義」者との対立＝「分離」を必然的であるとともに、結局のところ有意義だとさえ示唆していた。つまり、「ズルズルべつたり」を「止揚」するべく「自

己の陣営の内部にあらはれる一切の背離をその胚芽状態に於て摘み取」れ、というわけなのだ。しかしながら、この「革命主義」者がそのため論敵に対置したものは、わずかに「マルクス主義のABC」であり全くの基本原則にすぎなかつた。赤松ごとき「改良主義」は、自らの壮大な革命論体系のなかの「過程的」<sup>(18)</sup>な一部として取り込んでしまうのだ、という理論面での意気込みは、福本はもとより志賀にも、チリほども感じられない。

そういうたセクト主義的な革命論と前衛党論に、社会ファシズム論が付け加わったのだから、一九二〇年から三〇年代当時の理論内容の貧弱さは目をおおうばかりであったと言う他はない。すなわち、「労働階級の自己解放が遂行される唯一の方法は××〔革命〕的運動による資本家階級の××〔打倒〕と同時に自己の陣営内に於ける資本家社会の最大の支柱の一たる改良主義的方法の克服である」というわけだ。この頃日本共産党は、「合法無産政党を一律にファシシズムとして規定して」これと社会民主主義を一般にもつとも主要に「排撃」打倒すべき対象と見なしていたが、その弊はちょうどこの時期辺りから顕著となつていったのである。

こうして、一九二〇年代半ば以降革命主義が一方の極に、改良主義が他方の極に、明確に振り分けられ、鋭く対立してしまつた。その過程は、「あたかも坂道を駆け落ちるよう」ではあるが、その間に妥協とか、引返す余地とかがみじんも無かつたのかと言えば、事実はその反対であった。純化した考え、つまり「理論」（福本イズムを含む）と社会ファシズム論による峻別、それにもとづく相互反発、その結果としての二極分裂とい

う現実にたどった経過とは正反対のコースもあり得たことを推測させる合理的根拠が、存在していたのであった。たとえば、そういったオルタナティヴ・コースのひとつの中として、具体的な課題での共闘というやり方がその頃すでに実践されていたのである。

すなわち、(1)一九二五年一月三〇日、総同盟と関東地方評議会が中心となって「関東地方労働組合會議創立準備委員会」が芝鳥森で開かれたこと（これは「全国の労農団体の大協議体を結成」する動きの一環で、二月三日には「全国労働組合協議会」の打合せが大々的に開かれている）、(2)「悪法案反対同盟会」を組織して治安維持法反対運動を展開していくと取り決めたこと、(3)事実、ともに手をたずさえて集会、デモなどを実行していくことなどは、特記すべき具体例であった。また、同年四月一九と二九日といふぎりぎりの局面になつて、もともと総同盟の協力者であつた弁護士・高山義三や大阪毎日新聞記者・村島帰之その他による調停も行われ、妥協ないし譲歩の道が与えられたのであつた。

前引『労働組合物語、大正』によれば、最後の対立点は関東地方評議会の解散問題であったという。同年一月日本共産党再建を命じた上海チーベーを起草したコミニテルンのヘラーも、当時組織の分裂はぜつたに良くないという意見であつたと言われている（しかし、その意見は日本労働組合評議会を結成してしまつたその後に、日本側に伝えられた）。

——このような状況を全体的に勘案するならば、評議会を解散し、ふたたび総同盟内部にもぐり込んで、改良主義の思想的根拠

を全部みずから革命的構想の内に取り込んでしまうことによつてそれを根絶してしまう、そのような方針の採用も、当時のコミュニケーションにとって在り得たのではなかろうか。いずれにせよ、そういう方向を選択することのできる客観的条件は厳に存在していたのであつた。だが、現実にはそういう道は選ばれず、革命主義は教条（硬化）主義に、改良主義は修正主義へ、そして反共社会民主主義へと、それぞれ転落していき、たがいにより険しく争つていつたのである。

## 六、反日帝運動に対する対応の諸相

不毛と誤謬に充ちた論争ならびに運動・組織上の対立ではあつたが、議論内容としては、志賀義雄がこの段階で「封建軍国主義的帝国主義」規定を提出したこと（副次的には、無产階級が民主主義的ならびにプロレタリア的の変革を担うという革命論も）、また赤松克磨がすでに相当程度ナショナリズムに傾斜し、天然資源の欠乏、海外発展の絶望、民族意識の根強さなどを説いていること<sup>22)</sup>などが注目されるところである。

いわゆる軍・封帝国主義論が、世界的体系としての帝国主義の、日本という一国内における実相を適切に表現し得ていたかどうか。封建主義と軍国主義の各要素は、どういった部分に、どのような形態をとつて現われ、そして何よりも資本主義体系のなかでどのような位置・役割を占め、どういった機能を果していったのか……疑問は多い。植民地の中国人、台湾——「高砂族」、朝鮮人、

アイヌ人、ウチナーンチュなどに対する苛酷でじつに厳しい搾取と抑圧は、「封建的」というよりは近代帝国主義に特有のものであつた<sup>(23)</sup>、と言うべきである。軍国主義とは、近代帝国主義がとるもう一つのやり方である経済侵略つまり「平和主義」と並べられる戦術の一にすぎない。あるときは前者の戦術<sup>22</sup>やり方が、別的话题には後者のそれが選択・採用されるが、それは局面の評価、情勢認識の相違にもとづくものでしかない。志賀の軍・封帝国主義論では、そういうふうな位置づけとはなっていない。

また、一九二〇年代の、とくに中葉以降は、在日朝鮮人やウチナーンチュなどが非常な勢いで日本に流入し、関西を初め大工業地帯の大規模ないし中小の紡績工場や、中小零細の化学・製鉄・造船・製造（ガラスなど）などの各工場、あるいは九州・北海道などの炭坑で働くか、さらには日雇労働者として土木（道路・河川・港湾など）、建築（発電所も）、運輸交通（鉄道や運搬一般）各業などの労働に従事したのであった。こういった日本の底辺・下層労働者のいわば「国内植民地」的状況を、志賀の軍・封帝国主義論はどうのよう捉え、どう規定づけていたであろうか。赤松克磨も指摘しているように、志賀義雄はそういった日本の「実情」についていかにも「不案内」であり、理論内容上もそういう所をスッパリと抜け落ちさせている。もつとも、赤松自身はそういう問題についてはよりいっそう無自覚であつたから、この件に關して他を非難する資格のある筈もないのはもちろんである。彼・赤松は、(1)国内体制が天皇を価値の頂点とする階級秩序的<sup>23</sup>重層的な抑圧と搾取の体系を成していること、(2)であるが故に、対

外的にはいつそう激しく残酷に侵略する、(3)(1)と(2)が循環する過程で内外それぞれの規模が拡大する、(4)以上のような内外を貫く関係構造こそが体制としての日本帝国主義に他ならない、ということについて「一向に不案内」であつたからである。

そこで次に、元の左翼インテナショナリスト・赤松克磨のナショナリズム傾斜に焦点をあてて、転じた理由や論の立て方、内容自体などを見ていくことにしよう。時代背景として、第一次国共合作以降における中国「国民革命」運動の進展、朝鮮半島・「満州」・「日本内地」における朝鮮人による反日帝運動の昂揚などがあつて、赤松の例はけつして特殊なものではなかつたから、それだけ検討する価値が高いのである。

赤松ら「前期学生運動」出身の無産政党や日本共産党的リーダーたちが、総じて、国家論をまったく棚上げしつつ「世界の大勢」に棹さして、<sup>(24)</sup>「左翼」となった、ということは、今ではほぼ定説と言えるであろう。<sup>(25)</sup>したがつて、対外関係、客観状況などが変化すれば、赤松らの（日本）国家像もまた必然的に變つてくる、という構造になつていていたわけである。そこで、ここでは取りあえず通説に従つて、赤松の国家観における転換の基本的契機は対外関係の変化だった、としておこう。だがもちろん、その底には、関東大震災時の民族排外主義の嵐という、あの苦く辛い衝撃体験があつたことは言うまでもない。そうした下地があつたので、アメリカ合衆国排日問題は、彼のなかにわりと簡単に入つて行つたと考えられる。これら二者は、赤松がナショナリズムに傾斜したさいの具体的なきっかけをなすものであつた。この点について、もう

少し詳しく見ることにしよう。

一九二四年春、アメリカ合衆国では黄禍論 the Yellow Peril が猛然と起り、排日条項をふくむ新移民法が議会に上程されるまでになった。五月一五日議会で可決、同二六日クリーリッジ大統領裁可、という素早さであった（施行は七月一日）。これに対し日本では、四七月頃、映画や新聞などのジャーナリズムその他各方面において、反対運動が盛り上つていった。『朝日新聞』六月一六日付によれば、「対米労働連盟」なるものがこの頃結成されたが、それは「対米問題に就て労働団体が厥起はこれが最初である」という位置づけを与えたものである。

これに参加したのは、元昌友会の入沢吉次郎、水平社の平野重吉、立憲労働党の下沢秀雄、サラリーメン・ユニオンの杉原正夫などのほかに、「智識階級の諸氏」として井上敬次郎（元電気局長）、平井良雄（同理事）、馬場恒吾、そして赤松克磨などであった。同盟の綱領は、次のようである。

一、皇國の信義に基き國威の発揚を期す。  
二、伝統的友誼を無視したる米国官民の反省を促し大和民族の牢固たる決意を表示す。

「皇國の信義」「國威の発揚」「大和民族の牢固たる決意」といった用語法は、伝統的保守主義のそれ以外の何物でもなかつた。赤松がどの程度この問題に深く関与していたのか、するつもりであったのか、現段階では不明である。ただ、この当時赤松は、

前述のような「現実主義」への「方向転換」宣言の趣旨にのつとつて、広く「中産階級」下層とか、自由主義者や「進歩分子」な

どと提携すべしだと論じていたから、これへの参与はいちおう不自然ではない。しかしながら、幅広く中産階級や知識分子と手を結ぶこと自身に重きを置いていたのか、その特徴的な語法にもつともよく表わされているような伝統的保守主義の考え方にも共鳴していたのか、定かでない。

他方赤松克磨がこの頃排日問題に相当深い関心を持つていたことは、どうも間違いないようである。一九五年一〇月にも、「我国の労働者は、海を越えて米国に行きまた濠洲に行かうとすれば門前払いを食ふのである。それかといって支那や西比利亜に移住する」の訳には行かない」と述べている例が、あるからである。

問題は、このときこの排日問題に関連して彼が多少論じた民族と国家についての考え方である。つまり、「国民意識又は民族意識なるもの」を定義して、「一種の共同生活体意識であつて、長き歴史的進化が植えつけたところの本能的な大衆的意識である」としたのである。<sup>(28)</sup> この引用箇所の前後には、支配階級が「植えつけた」「高調した」「鼓吹してきた」などの語句がいくつも出てくるから、そういうた支配階級の政策・やり口が巧みに「長き歴史的進化」過程のなかに混入され、その結果「民族意識」「國民意識」は「本能的」とも言える程に「根強い」大衆意識となつた、というふうに言いたかったのであるう。語りないし疑問点、論点などが、ここには幾つか存在する。最大の問題で致命的に誤っているのは、「國民意識」と「民族意識」の同一視である。

従うまでもなく、國民とは、近代以降國民國家 nation-states が

形成されて以降の時期のものであって、支配権力によってある明確な区画のなかに入れられ、ひとつの政治的共同体の成員に組み込まれた人々のことであり、民族とは宗教・言語・習慣などをふくむ文化（場合によつては生業形態も）を古くから現在に至るまで共有しているが故におたがい同属であるという意識を持つ人々によつて構成されている、というのが通常の理解である。これとは違う定義をするのならば、論証と実証をそれなりにきちんととした上でなければならない。たいていの日本人論客同様、赤松はその手続を踏んでいない。素朴に「又は」で二者間を接続し同一視してしまっている。この結論も、普通の日本人が陥り易い誤りである。

おそらく前提となる認識に、まず欠落ないし誤謬があつた。赤松克麿は、「長い間の国際関係を離れた極東の「群島生活」といった物言いをしているが、徳川幕藩体制以前における活発な「国際」的交流のことも、「群島」のそれぞれに生活していた多種多様の民族——北はアイヌ民族、ウイルタ人などツングース系諸民族、ニヴフ人といった異民族や、南は琉球弧出身者という一群の異族の民に及ぶ——のことも、全く考慮のうちに入れていない。天皇制——維新政府権力が、そのようなさまざまの民族や人々の土地や収穫物などを暴力的に取り上げて自己の領土としたこと、その伝統的文化を破壊し日本への同化を強要したこと、もつて近代日本における国民国家を形成したこと、そういう歴史的事実を赤松は完全に抜け落としている。

近代日本国家に、赤松が結論的に主張するような「一種の生活

「共同体意識」があるとするならば、それは天皇制権力によって諸民族・人々の諸々の「生活共同体」が表面上ひとつの中に強力的に統合された、という意味でしかない。その内実は、さまざまに格差をつけられ貶められたそれらの民族文化と生活共同体が、それぞれ低位・下層に位置づけられた、じつにすさまじいまでの重層的な差別の上下体系、入り組んだ階級秩序に他ならなかつたのである。そして大多数の日本人（「大和民族」）は表面上の統合に呪縛されたが、天皇制国家の枠内に強引に統合された異民族・異族の民や「国内植民地」状況下の底辺人民に位置づけられた日雇労働層などは、そういうつた呪縛とは無縁であり、より開かれた意識を持っていたのである。

このように、赤松克麿の、民族と国家についての論理には、少くとも結果的にはまぎれもない詐術が存していた。志賀ら当時の日本共産党陣営の、あるいはマルクス主義者の誰ひとりとして、そのところの綾と謎、そして呪縛を論理的に腑分けし、理論的に解き放つことをついに成し得なかつた。致命的弱点と言わざるを得ないゆえんである。

この段階において日本ナショナリズム論をとつた赤松克麿は、このあと一九二〇年代後半から三〇年代中に、日本ファシズム論の一形態たる国家社会主義へ、そして日本主義へと転落していく。現実一実践面においてその媒介項となつたのは、おそらく、民族意識＝国家意識を乗り越えた自立的、主体的な大衆に彼が出会えなかつたことによるであろう。

そのことのマイナスは、志賀ら日共的コミュニズムも（おそらく

く当時のすべてのマルキストも) 背負っていたであろう——志賀の場合、我国の労働大衆は「未だなほ国民主義的觀念に支配されて居る」という認識は持っていたものの、それを封建的要素とのみ見なし、その打破・除去のために民主主義的な改良闘争の必要性を論じたにすぎなかつた。「かの大地震」において猛威を振るった民族排外主義は、日本帝国主義が対外戦争を始めたとき国民に取り憑くであろう狂熱主義<sup>(ショーヴィニズム)</sup>と全く同じであることは明らかである以上<sup>(29)</sup>、そういった「現実を直視」した上で、反・民族排外主義の考え方を身につけるべく強力に教育と訓練を独自に展開しなければならなかつたはずである。そういう方向の模索も萌芽も、当時どこにも見出すことはできなかつた。労働運動も、基幹・大産業優先であつたし、(大)工場労働者を中心とした対象としていたのであつた。中小や零細の工場や産業は、それでもときに(争議発生などで) 注視されることはあつたものの、アイヌ人、ウチナーチュ、在日朝鮮人自体や、彼らが多く密集している地区や寄せ場のこと、彼らが就いている土木・建築などにおける日雇労働といつた部分に目が向けられることは、二〇年代においてほとんどなかつた。

一九二五年二月、その圧倒的多数が日雇労働者である在日朝鮮人によって、在日本朝鮮労働総同盟が結成された。彼らは、自分たち在日朝鮮人日雇労働者総体が日帝という巨大工場のいわば貨金奴隸の位置にあると把握し、したがつて民族解放＝祖国独立を目指す闘いがすなわち資本主義打倒の闘いとなる、としていた。在日労総はまた関東、関西……といった地域的結集体であると

もに、おたがいに生活面でも助け合う、という特徴を持つ非常に独特の組織原理を有していた。こうして見ると、そこには民族と国民の壁を突き破つた自立的・主体的な大衆的結集体の、少くとも一例が嚴存していたのである。<sup>(30)</sup>しかしながら、赤松克麿も志賀義雄、水野成夫も、在日労総のような組織の豊かな内実に気づく理論上の下地はおろか、感性の一片さえも持ち合わせていかなかつた、とせざるを得ない。

それどころか、中国・朝鮮などアジアにおける、そして日帝内奥(底辺)における、民族解放を求める反日帝運動の昂揚に対し、赤松はナショナリズム論を、のちには日本ファシズム論を、志賀ら以下の「獄中一八年組」はまったくの零つまり思想的居眠りを対置したのであつた。一九二九年五月三〇日、かつて赤松をファシストと罵つた水野成夫は、「日本共産党脱党にさいし党员諸君に訴う」を発表し、「天皇制のもとでの一国社会主義」へと転向したが、まことに象徴的であつたと言わねばならない。民族排外主義の乗り越えと革命主体たる大衆像の発見なくしては、かの奔流のようなショーヴィニズムの猛威に対し、屈服つまり転向も、文字通りの居眠りか、でしか応ずることはできない。赤松も、志賀、水野も、九・一八事変から日中戦争へという時期の前夜、一九二〇年代後半という時代のなかで、じつに同根の宿痾を抱いたまま、生きながら死んでいたのである。

## 七、おわりに

その後、赤松克麿にひとつの代表を見た右翼社会民主主義は、どういったところへ向つただろうか。

一九二七年四月、もうひとりの右翼社民＝高橋龜吉が発表した「チ帝国主義論」は、その後の赤松の軌跡とも関連して、まことに興味深いものである（猪俣津南雄、野呂栄太郎などとの間で論争となつた）。高橋龜吉はそのとき、国内重工業と独占（資本）の未発達、ならびに西欧帝国主義によるアジア諸国圧迫を根拠として、レーニン帝国主義論のアジアと日本への適用を否定した。同時に、当代日本資本主義の「行詰り」を打破するために、国内においては、出来得る分野・部門から順次「部分的に」「経済活動の科学的統制」つまり「社会主義化」を実施すること。対外的には、西欧帝国主義による領土と資源の独占状態を破り、日本の人口・食糧問題を解決するために、「領土解放戦」を積極的に起<sup>(31)</sup>こすべきである、と論じた。

厳格な「管理」がなされなければならない、というのであつた。<sup>(32)</sup>以上のような両名の議論をつなげると、中国国民革命の東北地方への波及を原因とした「満蒙問題」を機として、日本側から対外戦争の火蓋を切れ、そうしてそこを官僚によって計画的に統制し管理せよ、という結論が理論上導き出される（たとえば一九三一年になると、赤松は実際にも「満蒙の社会主義的管理」を要求するまでになつていて）。

このように、彼ら右翼社会民主主義派は、一〇年代後半社会運動の陣営のなかから、戦争を遂行するに必要な議論つまりイデオロギーを準備し提供したのであった。すなわち、それは内部から反ファシズム運動を潰し敗北させるためのものであつたとともに、大衆をよりいっそ強く排外－榨取－抑圧の方向に動員していくために積極的な役割を果したのであつた。

日本の帝国主義とファシズムに反対し抵抗する動きは、アイヌ・モシリ（いわゆる北海道）、琉球弧、「台湾」、朝鮮、中国などの植民地（琉球弧については準をつけるべきかもしれないが）や、広い意味で「国内植民地」と言われる在日朝鮮人部落や寄せられたように国家現状論から出発する。すなわち、一種の生活共同体（意識）と社会的階級対立併存の上に、「官憲」つまり「統治階級」が「超然」とそびえ立つてゐる、とする。だが、そのあと日本の経済的行詰り論をとり、赤松は高橋龜吉に合流する。すなわち、天然資源欠乏－海外発展絶望のため行詰つた日本資本主義経済を改革するためには、階級的不正つまり実質的不平等の是正が必須である。言いかえれば、「国有」化がなされ官僚による

見たのであった。

赤松克麿—高橋龜吉のような（右翼）社会民主主義派も、志賀義雄ら戦前日本共産党勢力も、その他のマルキストも、そういう大衆と大衆運動についてまったく「無自覚」であった。対外侵略戦争とこれへの国内的対応つまり塞息体制化が、これ以後三十年代中に歯止めもなく推進されていったのも、けだし止むを得なかつたと言わなければならない。

### 注

(1) 拙稿「共産主義派と社会民主主義派の競合と対立—赤松克麿を中心にして」（東京女子大学比較文化研究所紀要第43巻、一九八一年）において、それ以前の時期の赤松克麿について検討した。本稿は、ある意味においてその続きである。

(2) 有馬学「『前期学生運動』と無産政党リーダーシップの形成—『政治』観の問題を中心に」（『年報・近代日本研究、近代日本と東アジア』一九八〇年一月山川出版社刊）を参照。なお、同論文は小論とは視角が相当異なるものの、一九一八年二六年の間の新人会、建設者同盟などのメンバーの軌跡を特に理念面から詳しくたどつており、たいへん参考になる。赤松などに関連して同意できない何ヶ所かをのぞけば、その緻密な各論点の展開はおおむね肯定し得る。

(3) 『続・現代史資料(2)社会主義沿革(2)』（一九八六年七月みすず書房刊）四〇、四六、六三、五、六九、七〇、一三八、四〇、一二三八、四〇ページ。

(4) 赤松克麿「労働組合を離れて労働者の城壁なし」（『鉱山労働者』二一三、一九二一年三月二日）参照。

(5) 主要に以下によった。①、については、「社会と階級」（『鉱山労働者』三一一、一九二二年一月一日）。「新興愛国団体批判、反動団体のいろいろ」（『改造』一二三年三月）。「民族闘争と階級闘争との交響」（『労働』二二一年六月）。「時代批判（国家と道徳）」（『先駆』二〇年五月）。「黒人解放運動の現勢と其の傾向—人種闘争と階級闘争」（『改造』一二三年八月）。「二種の革命行程」（『進め』二三年四月）。

なお、①口、国家論の棚上げといふことについては、前掲有馬論文（特に三〇五、六ページ）がすでに指摘している通りである。ただし、抜け落ちているものの指摘においては、拙論とは機分相違があるようである。

②、については、「農民運動の飛躍的発展」（『赤旗』三四、一三年四月）。「わが国に於ける労働組合の生存闘争(1)」（『階級戦』四一一、二三年七・八月）。「労働組合を離れて労働者の城壁なし」（『鉱山労働者』二一三、二一年三月二日）。「労働者の必ず知らねばならぬこと」（同二一四、二一年四月一日）。「労働争議の旗印問題—団体交渉権と工場委員制度」（同二一一〇、二一年一〇月一日）。「労働組合総連合の決裂に関する大正一一年度〔総同盟〕宣言」（一九二二年一〇月三日、『転換期の社会運動』所収）。「アンケート、無産階級から見た朝鮮解放問題、解答」（『赤旗』三一四、二三年四月）。「婦人問題」（『鉱山労働者』二一一、二一年一二月

一日)。その他①と重複するものについては省略した。

(6) 『現代史資料(6)関東大震災と朝鮮人』(みすず書房一九七五年刊)三四五~六ページ。田中惣五郎『大正社会運動史』

(三一書房一九七〇年刊)七一七~八ページ。  
(7) 赤松が書いた最初の労働運動史の書である、安部磯雄・山川均・堺利彦共編の社会問題叢書第3巻『日本労働運動史』(文化学会出版部一九二五年)において、そのことは「運動方針を現実化せんとする傾向」と表現され、一九二二年の山川均による方向転換論と総同盟の合同主義を経た後、そういった「労働組合の現実化傾向」は、大正十二年九月に起こった

関東大地震によって更に一層促進され、且つ普選実現期の切迫、政府の国際労働機関に対する態度変更によって、益々強められるに至った」と記されている(七九ページ。一二八~三〇ページにも同趣旨のことが書かれている。なお、一三九ページも参照)。また、一四一ページでは、より端的に「震災が労働運動に与へた最も大なる影響は、組合勢力の無力を労働運動者に痛感せしめたことであつた。從来の潔癖な独り善がりの仲間同志の運動が、何等社会的勢力を築き得ざりしことを如実に見せつけられ、心ある労働運動者は深く反省するところがあつた」としている。これとほぼ同様なことが『社会運動の現実主義』(青雲閣一九二八年)一七~八ページにも述べられている。

(8) 「震災が社会運動に与へた影響、資本の集中とデモクラット運動」「組合運動者諸君に訴ふ」(いずれも『進め』二三年

一二月)。「農民の政治運動—農民党組織に就いて」(田中前掲書七四七ページ所収)。「無産階級の政治舞台登場」(『改造二三年一二月)。「戦後の無産階級政治運動」(建設者同盟

『青年運動』一四年二月)。

(9) 前掲『転換期の社会運動』一一四ページ。

(10) 同上九六~一二七ページ。「鈴木文治氏の進退に關し福田博士の妄論を駁す」(『改造』一四年六月)。

(11) ①~④は「我国資本主義の特殊性と無産階級政党」、⑤は「科学的日本主義へ」(ともに前掲『転換期』所収)。

(12) 前掲有馬論文をも参照せよ。

(13) 「無産者大会の印象」(『進め』一四年四月)。「第四回農民組合大会を観て」(『改造』二五年四月)。「鉱夫組合運動と無産政治運動」(『鉱山労働者』一四年一月一日)。「学生と社会運動」(『改造』二五年七月)による。

(14) 前掲「組合運動者諸君に訴ふ」。

(15) 前掲「鉱夫組合運動と無産政治運動」、「俸給生活者の行くべき道」(日本工人俱楽部での話、二五年一月二十五日、前掲『転換期』所収)。

(16) すでに一九二三年二月の段階でアナキストからは、そういう名で呼ばれていた。『組合運動』(田中前掲書六四一~二ページによる)。

(17) 以下、主として松尾洋・大河内一男『日本労働組合物語、大正』(筑摩書房一九六五年刊)三一七~四〇、三四九~九一ページその他による。

(18) 前掲志賀論文にもしあはしが引用されてゐる北条一雄「歐州における無産階級政党組織問題の歴史的發展(工工三)」(『マルクス主義』二五年四月号)によ。北条一まり福本和夫が回りくどい言い方で、しかし日本史上初めて、革命を担う前衛政党の結成を説いた有名な論文である。

(19) 岡本宏「労働運動の激化」(岩波講座日本歴史19、一九七六年)二二五ページ。

(20) 前掲『組合物語』三四七~九、二二五一ページ。

(21) 同上二二七一~四ページ。

(22) 志賀の論点として要約した①(本文9ページ)、並びに赤松「我が国社会運動の発展過程」(志賀への反論)、「最近日本社会運動の転向に関する考察」(二二五年一〇月)(いずれも『転換期』所収)。また、同書八、一四、二二五~六、七一ページなど参照。

(23) 近代帝国主義といふ方は、それ以前の時期における、たゞえは封建制下の重商主義段階などにおける広義の帝国主義との区別のためのものである。たゞあえや、ホブソン『帝国主義論』上巻(岩波文庫)の他、最近の Dan Nabudere, The Political Economy of Imperialism, Zed Press and Tanzania Publishing House, 1977 を参照。ちなみに、後者によると「帝國主義」が、次の四種類に分かれてゐる。  
Mercantilist Imperialism, Free-trade Imperialism, Modern Imperialism, Multilateral Imperialism.

(24) 稲稿「日本帝国主義と在日朝鮮民族」(東京女子大学比

較文化研究所紀要47卷一九八六年)、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』全五巻(三一書房一九八一年刊)など参照。

(25) たゞえは前掲有馬論文を見よ。

(26) 田中前掲書七七八ページ。

(27) 前掲『転換期』二五ページ。

(28) 同前二六ページ。なお、一九二六年四月段階になると「左翼が舶来的、ロシア的であるのに對して、右翼(自己を含む)は国産的、日本のである」とか、「右翼は民族意識の中に或る妥当性を見出」す、といった件が見られる。ここでの論点から必然的に導かれた端的な結論に他ならない。「二個の指導精神」(『改造』二六年四月号)参照。なお、「支配階級は「國家百年の計」を思つて労働争議に「聰明な態度」をとれ、としたのも、ひじでの論点たるナショナリズムからの系である。「英國経寵業の我が国労働運動に及ぼす影響」(『改造』二六年六月号)を見よ。

(29) Eric Hoffer, The True Believer, Harper & Brothers, 1951 (邦訳『大衆運動』紀伊国屋書店) 参照。

(30) 梶村秀樹「在日朝鮮人と共同闘争—戦前の合同解消論」(『架橋』11・27講演集会実行委員会一九七八年刊)、「解放前の朝鮮人運動史—在日朝鮮労総結成—全協への解消過程を中心として」(『在日同胞労働者と労働運動』在日同胞労働問題研究会一九八一年刊) 参照。なお、朴慶植『在日朝鮮人運動史』(三一書房) もあ。

(31) 高橋龜吉「末期における帝国主義の変質」(『社会科学』)、

「日本資本主義の帝国主義的地位」(『太陽』)、いずれも一七年四月号、による。

(32) 赤松「官憲の特殊心理と民衆運動」(『改造』二六年九月)では、官憲が「時勢の趨向」に乗つとり「新しい内容を持った国家主義」を身につけるならば、「我国社会運動の進展過程」は「著しく合理化」される、つまり官憲と民衆運動とが協力し手を携えて社会的不平等のは是正に赴くことができるであろう、と主張された。なお、前掲水野論文(『マルクス主義』二六年一一月)が引用している、『民衆新聞』六号の「社説」(赤松執筆、二六年末)をも参照。

(一九八六年九月三日第一稿 一九八八年八月完成稿)